

昭和ヒトケタの遺恨

井出孫六 著

昭和ヒトケタの遺恨



井出孫六(いでまごろく)

1931年長野県に生まれる。東大仏文科卒。58年『中央公論』編集部に勤務、69年退社。『アトラス伝説』で第72回直木賞を授賞。主な著書としては『秩父困民党群像』(新人物往来社)、『自由自治元年』(現代史出版会)、『アトラス伝説』(冬樹社)、『明治取材の旅』(総聞書店)、『虚栄の時代』(毎日新聞社)などがある。

現住所-183 府中市武蔵台3-31-4

昭和ヒトケタの遺恨

¥ 1,800

1978年6月1日 第1刷発行

検印
省略

著者 井出孫六
発行者 近藤源一
高橋満

発行所 柏書房(株)

113 東京都文京区本郷1-33-3
東プロビル

製版/祥文堂印刷所

印刷/祥文堂印刷

製本/小高製本

昭和
ヒト
ケタ
の
遺
恨
●
目
次

I

昭和ヒトケタの遺恨	10
元号と西暦と日本人	20
天皇制の底流	32
勅語と世論	35
憲法再読	38
追悼しつづける執念	41
南の島の八月十五日	44

II

「無冠の帝王」の妻	60
振袖の消えた街	61
美少年	63
下駄スケート	65
禁煙	66
プロパン登場	68
不感症	70
啓蟄	72

税の季節	73
歴史の教科書	75
運転免許	77
大学講師	78
珈琲党	80
峠	81
地域の財産	83
語学	85
落葉松	86
シミ塗り教科書	88
モンテ・ニョ	90
予言	91
電信柱よ!	93
ある棟梁の履歴書	95
仮面の福祉	97

Ⅲ

元旦の都心	100
賀状について	102
いばれるとしてみる	104
成功の秘訣	106
二つの外交事件	108
クラス会	109
修学旅行	111
『ゴミ屋の記』	113
葡萄と蘭	115
北斎館	117
芋・繭・薪	119
冬から春へ	121
珍客	123
珍客その後	125
消えた峠	127
多摩の丘陵で	128

奇病

.....

130

菖蒲湯

.....

132

二人の先輩の逝去

.....

134

山辺さんのこと

.....

136

二つの町

.....

138

あまりに大きすぎる

.....

140

わがまち

.....

142

戦後の年表

.....

144

もう一人の村田蔵六

.....

146

田中正造の弟子たち

.....

147

Ⅳ

鞍山で聞いた声

.....

152

樹 霊

.....

155

歴史を連続の相で

.....

159

元と心

.....

163

『アトラス伝説』異聞

.....

165

V

一枚の地図	169
ロビンソン・クルーソー初訳	173
鞆に甫翁を入れての旅	177
古書インフレ禍	182
気にかかる木口小平	186
豊かな国語のために	190
現代のモラル	194
いま「ムラ」は	203
「言論の統制」と桐生悠々	215
現代「世直し」考	223
秩父事件のロイヤールたち	227
「セコ道」のよみがえり	229
故郷について	236
野沢菜	239
佐久鯉	242

雪 型	244
にゆるの世界	247
一幅の書額	250
裸の講談師	256
大家族の中の母	260
あとがき	277
初出紙誌一覧	279

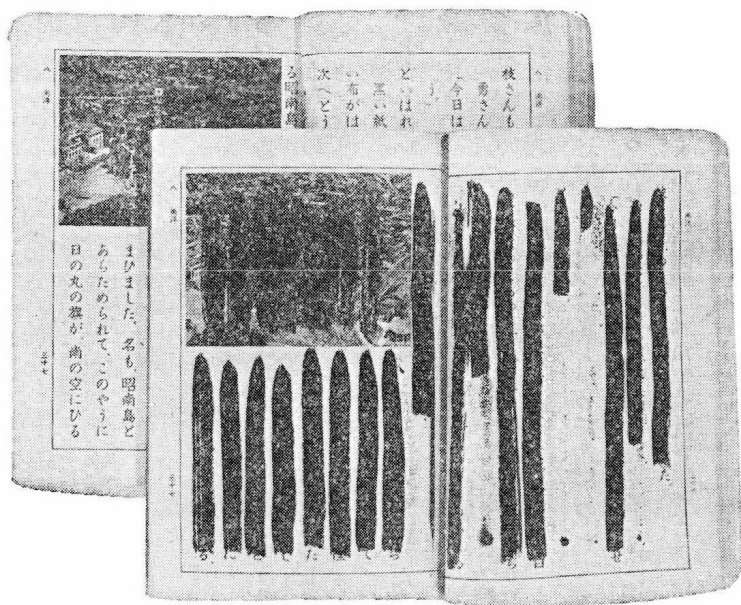
写真・資料提供・国立教育研究所

礒山美術館

北斎館

国土地理院

I



昭和ヒトケタの遺恨

印刷された文書にあらかじめ「昭和」とあってそのあとの空欄に否応なしに「五十」という数字を書かされるとき、わたしの心に抵抗感のようなものがちらっと走る。そして、あとに押しつけられた不愉快さのこる。

年賀状とか移転通知などを印刷するとき、わたしはいつも西暦を使うことにしている。わたしと同じ世代ならば誰でも「昭和」という元号を使うのを潔しとしないだろうと思うのだが、ときたま「あいづが！」と思うような人物が「昭和」と刷りこんだ挨拶状をよこしたりするとき、その人物に対する認識を変えるべきかな、と思ったりすることがある。

もっとも、昨年の暮、近所の文具店に印刷をたのんだ年賀状が、でき上がってきたのを見ると、注文した原稿とはちがって、「昭和五十年」となってしまうていた。印刷し直させるには期日もなく、文具店にも気の毒であったから、不本意にも元号の印刷された年賀状を出すことになってしまったが、あとあじの悪い年末であった。「昭和五十年」をきっかけとして、元号がふたた

びわたしのまえに立ちはだかつてくるのではあるまいかといった不吉な予感で明けた正月であった。

元号をめぐる、いま三つの年がわたしのなかに刻まれている。明治元年、明治四十五年、そして昭和二十年というこの三つの年を、ここで西暦に対置してみよう。明治元年が一八六八年であり、昭和二十年が一九四五年であることは、わたしの頭に容易に浮かんでくる。三百年の鎖国をといて世界に扉を開いた明治維新が一八六八年であることは、歴史の時間に学んだこととはいえ、なじんだ知識として定着している。一方、昭和二十年が一九四五年であることは、わたしの体験のなかで、敗戦の年として明確に定着している。

明治元年と昭和二十年とは、ともにそれまで世界史のなかで孤立した状況におかれていた日本が、その孤立を廃して世界史にあらためて交わりなおした年だという共通性がある。その共通性のゆえに、明治元年と昭和二十年とは、容易に西暦ときり結んでわたしたちのなかに定着しているといつてよいだろう。

それにひきかえ、明治四十五年が西暦の何年であるかは、年表の助けをかりることなしには、浮かんでこない。どうやら、明治四十五年というのは、西暦から最も遠くかけ離れてしまっている時間のように思われる。明治の末に生きた三人の文学者のことが思いうかぶ。石川啄木が「時代閉塞の現状」を嘆いて日記をローマ字で書いたこと、幸徳秋水の乗せられた囚人馬車をみて永

井荷風が戯作の世界に入っていくのだと決心したこと、乃木大将殉死の報に接した夏目漱石が割腹の痛みを自らの痔疾にたとえて何層倍も痛かったろうと、ブラック・ユーモアを、ひとりつぶやくように日記に記したこと。明治四十五年は、あまりにも西暦とかけ離れたっていることがわかるような気がする。

明治元年、明治四十五年、昭和二十年の三つの点をサインカーブであらわせば、明治元年と昭和二十年は西暦というX軸に交わっている時間で、明治四十五年はX軸から最も遠いサイン九〇度の地点にあるとでもたとえたらよいだろうか。明治四十年代の啄木も、荷風も、漱石もともに己れの生きている時間が、世界史の時間からどんどんかけはなれていってしまうのを、ひしひしと感じていたのではなかったらうか。

明治四十五年七月二十九日深更、明治天皇は亡くなった。天地諒闇、やがて九月十三日から行なわれる御大葬に先立って、陸軍大将乃木希典夫妻が自決して殉死をとげた。それは、さかのぼること四十五年まえ、五箇条の誓文で「陋習を破り天下の公道に就くこと」を宣言した維新の精神に逆行して封建の陋習を復活するものであり、そのような批判を乃木大将の殉死にむけて放った「信濃毎日新聞」主筆桐生悠々は、在郷軍人会を中心としたファナチックスの激しい非難を浴びることとなった。明治四十五年は遠く西暦と相へだたっていたのである。

わたしはむろん明治元年も明治四十五年も知らないけれども、昭和二十年という年には中学二年生として、その時間に立ち会った経験をもっている。昭和十五年にわたしたちは皇紀二千六百年という国を挙げての式典に動員され、リヒアルト・シュトラウスの式典曲とともに奏でられた「金鵒輝くニッポンの……」というメロディを、くる日もくる日も口ずさんでいたから、到底わたしの頭のなかに西暦の入りこむ余地などはなかった。

昭和二十年八月十五日、その日の記憶はわたしのなかに鮮明にぎざまざっているが、いまその日を想い起こして年号にかぎって考えてみれば、あの一日には二つの年号がダブって存在しているように思われてくる。

あの一日の午前中は、どうしても昭和二十年八月十五日と呼ばなければおさまりがつかず、あの一日の午後はどうしても一九四五年八月十五日としか呼びようがないものとして、わたしのなかに定着している。むろんそれは後年、さまざまな知識が加わっての認識というべきものにちがいないのだけれども。

当時、わたしは信州の高原の中学二年生であった。激しい空襲を受けるといふようなこともなく、たまにB 29の飛行雲が青い空に描かれるのを、草むらのなかから眺めるといった呑気な環境

ではあったけれども、わたしたちの中学では三年、四年、五年生は名古屋の軍需工場に動員されて、学校にはわたしたち一、二年の低学年組が残留しているだけであった。その低学年生も、まともな授業はなく、働き手を戦場にとられた農家への勤労奉仕がつづき、戦局の苛烈になった昭和二十年の春ころからは、高原に疎開してきた飛行機工場の地下工場建設の穴掘りに毎日動員されて出かけていっていた。夏休みもろくに与えられないような雰囲気のほか、八月十五日には学校に登校せよとの通達があった。「重大放送がある」と、あらかじめ知らされていたが、軍国少年として訓育されていたわたしたちは、戦局の重大さのなかで、いよいよ竹槍をもって敵を迎える日の近いことが告げられるのではないかなどと予想して、心ひきしまる思いで登校していったのだった。

久方ぶりに行った学校の校庭には、数カ月まえわれわれが堅い土を掘り起こして植えたサツマイモが青々と茂っていた。わずかにのこる中庭にわれわれは集合し、物理教室の窓にすえられた古ラジオをまえに、直立不動のまま正午の放送に耳を傾けたのである。

高原にかすかな涼風がわたっていたとはいえ、雲一点ない晴れた夏の盛りであったから、白日のもと直立して放送をきくわれわれの戦闘帽のヒサシの下からはたらたらと汗が流れしたたっていたにちがいないのだが、不思議なことに、わたしの昭和二十年八月十五日正午の記憶のなかには酷暑の温度は全く消えさっており、まるで真空のなかにおかれた映像のように、汗までもガラ